

金剛寺一切經と新出安世高譯佛典

梶 浦 晉

はじめに

大阪の河内長野市にある天野山金剛寺は、眞言宗の古刹で、女人高野として知られ、多くの古文化財を收藏することでも知られている。この金剛寺に平安時代後期から鎌倉時代にかけて書寫された一切經が存在することは、早くより知られていたが、充分には注目されてこなかった。筆者は、縁あつて同寺所藏の古寫本一切經を調査する機會に恵まれ、從來知られることのなかった新出經典をこの一切經中より見いだすことができたので、ここにその概略を報告することとする。

一 天野山金剛寺略史

天野山金剛寺は眞言宗御室派の大本山で、大阪府河内長野市天野町にある。寺傳によれば行基が聖武天皇の敕

願によつて開創したと傳える。その後、平安時代前期から中期にかけて寺は停滯期をむかへ詳しい狀況を傳えない。永萬元年（一一六五）に阿觀が後白河法皇に寺の再興を奏上し、承安元年（一一七一）に造營が開始された。翌承安二年には高野山より弘法大師像をむかへ御影供を修した。この御影供は今日においても同寺の最も重要な法要の一つとして續けて營まれている。これが今日の金剛寺の實際上の始まりといふことができる。このころ在地の有力者源貞弘より私領の寄進を受けており、寺の經濟的基盤となつたと推定されている。また同じころ鳥羽院第三皇女八條院暲子内親王の祈願所にもなり、中央との結びつきももち、ますます寺が整備されることとなつた。その後、建久九年（一一九八）には仁和寺の末となつてゐる。

承元元年（一二〇七）に阿觀が没する頃までには、八

條院の祈願所として、また學問寺として、金剛寺の寺觀の整備が基本的に完了したと推定されている。鎌倉時代末から南北朝時代に至って、同寺は大きな變動をむかえた。このころ正學頭として寺を指導した禪惠は、動亂の時代にもかかわらず、經典・聖教類の書寫や蒐集につとめたようで、同寺には今日も禪惠の奥書を有する典籍が多く残されている。

政治的には、同寺は楠氏との關係や、八條院の祈願所であったことから大覺寺統との結びつきが深く、南朝方の據點となり、物心兩面の援助を行うこととなり大きな負擔を背負うこととなった。正平九年（一二五四）〔北朝文和三年〕三月には、北朝の光嚴・光明・崇光三上皇が同寺觀藏院に幽閉された。同十月には南朝の後村上天皇が同寺摩尼院にとどまり同寺食堂を政廳として政務をとること數年におよび、南北兩朝の天皇・上皇が同じ場所に同時期に滞在するという、特別な状況にあった。室町時代以降は所領や世に名高い天野酒による經濟力を基盤に繁榮を保ち、その後もさまざまな曲折を経ながらも、今日までよく寺觀を保ちつづけている。

同寺には金堂・御影堂・多寶塔などの古建築群とともに、彫刻・繪畫等の法寶物も數多く藏せられていること

は周知のことで、金堂の大日如來・不動明王・降三世明王の三尊の彫刻や尊勝曼陀羅圖、弘法大師繪像など國の指定を受けているものも少なくない。また文書・典籍も多數あり、明治以降、數度の組織的調査が行われている。

文書は早くより注目され『金剛寺古記』『金剛寺文書』や『河内長野市史』などにまとめて翻刻・紹介されている。^①典籍についても注目すべきものが多數あることが指摘されていたが、平安時代寫『延喜式』（國寶）や藤原基衡發願千部一日法華經のひとつ『妙法蓮華經』卷第八、『梵漢普賢行願讚』（いずれも重要文化財）のほか淨土教研究の貴重な史料『明義進行集』など一部の古寫本を除いては、研究者の充分に注目するところとはならなかった。

近年にいたって大阪大學の後藤昭雄教授によって、金剛寺所藏典籍のうち國文學・漢文學關係の資料が相次いで研究・紹介されている。^②後藤教授は國文學・漢文學關係典籍の整理・研究と併せて、ここ數年は同寺所藏の古寫本一切經の整理を進められている。筆者は、同寺に願い出て後藤教授の作業に参加させていただき、その過程で金剛寺一切經中より從來その存在が知られなかった古逸の經典を見いだすことができた。

二 金剛寺一切經の概要

金剛寺に古寫の一切經が存することは、全く知られなかったわけではない。明治以降においては、黒板勝美を中心とした國史編纂のための史料収集の際、古寫經が多數あることが報告されている。本格的な經典調査は昭和十一年に常盤大定を中心とする東方文化學院東京研究所の調査がはじめてであり、續いて昭和十五年には京都帝國大學國史學研究室の調査が、また昭和四十年代には『河内長野市史』編纂のための調査がおこなわれている。東方文化學院東京研究所の調査では、散亂していた經卷を配列しなおし目録も編纂している。^③またこの時の調査に基づき三好鹿雄が「金剛寺一切經の全貌」なる論文を発表し、その現存狀況や書寫時代などについて考察を加えている。この論文によって、金剛寺一切經の概況を一應把握することができる。しかしながら、三好論文が發表されてより以降、京都帝大や市史編纂関係者はもっぱら奥書のみを利用するだけで、一切經そのものが本格的に研究されることはなかった。

先にも記したように後藤教授を中心にこの一切經の再調査を行っている途中であるが、これまでに判明したこ

とを、三好論文も參考にその概略を以下に記す。

現在、經卷の多くは木製の箱に收められている。箱は時代や大きさが異なるものが混じっているが、もともと一切經の箱であつたものと、聖教類や文書類を入れた箱とがあり、その制作年代も中世から現代のものまでさまざまである。東方文化學院の調査時には、不足分の箱が新調され、目録にしたがい四十箱に分納され、箱の側面に千字文を記した紙片が貼られている。しかし後の調査の影響が現在では正しく收められてはいない。

現存卷數は、三好論文では約三千百三十卷あると記されているが、この數は不確定なもので、現在行っている詳細な調査で訂正がなされるであろう。三好は論文において、『大般若波羅蜜多經』（以下『大般若經』と略）が二部存し、三百二十五卷現存する一群を一切經の一部と考え、もう一部のものと一緒に經との關連については判斷を留保している。現在も、『大般若經』は大きく二つに分けて保存されているが、ひとつは白木の唐櫃三つに收藏されているもので、約三百卷ある。櫃の側面に「天」より「奈」までの千字文を記した紙片が貼付されており、これが三好が一切經の一部と考えたものであろう。いまひとつは漆塗の長櫃一つに約六百卷が收められているも

のである。その形状や大きさより、元來は經櫃でないものを轉用しているかとも思われる。現在、双方の箱に分蔵されている經卷のうち元來一具のものと推定されるものが相當數あり、詳しく調査をしたうえで辯別する必要がある。『大般若經』は少なくとも二種類あるが、いずれもそのほとんどが平安時代時代中期乃至後期の書寫と推定されるものである。『大般若經』以外でも、『成唯識論』など複數部ある經典が確認されており、これらの問題を解決してのちはじめてこの一切經の現存卷數を確定できる。

江戸時代に修補が行われたようであるが、現在の保存状態は必ずしも良好とはいえない。虫損・濕害や糊離れのほか、軸や表紙の缺損が相當數ある。幕末明治初年の廢佛毀釋の影響のほか、明治以降の調査時の扱いにも問題があったように思われる。

つぎに書寫の年代についてであるが、奥書で最も古いものは『大般若經』卷第四百の承暦三歲（一〇七九）のものである。また卷第五百には久壽二年（一一五五）に開題供養した由が記されており、同寺所藏の『大般若經』二部のうち一部は、久壽二年以前に完成していたと考えることができる。しかしながら、この卷がもとから

一具のものかどうか、『大般若經』は二部あり何れが一切經の内であるかについても未だ解決できておらず、この『大般若經』書寫の年代をもつて金剛寺一切經の書寫の始まりと斷定することはできない。ことに、『大般若經』は二種とも黄蘗染の料紙を用いているのに對し、他の大部分は白紙を用いていることなど形態的に違いもあり、検討を要する問題である。あるいは、はじめは『大般若經』のみの書寫が行われ、後に一切經書寫に引き繼がれたことも考えられる。

『大般若經』以外で古い紀年をもつものとしては寛治五年（一〇九一）の加點奥書をもつ『佛母大孔雀明王經』がある。また『大智度論』卷第二十が保安五年（一一二四）の書寫奥書をもつものとして注目される。これについて長承二年（一一三三）の『高僧傳』卷第五、保延元年（一一三五）の『經律異相』卷第三十五など十二世紀中期から後半にかけての奥書をもつものが増加してゆく。平安時代後期から鎌倉前期にかけて最も盛んに書寫が行われたようである。鎌倉時代では嘉禎年間（一二三五―一二三八）の奥書が多數あるが、これ以降の奥書を持つものは激減する。一切經全體としては紀年奥書を持たない經卷が大半であるが、そのほとんどが奥書を持

つもの特徴を同じくする。これによって推定するに、金剛寺一切經はその始まりを明確にはしえないが、平安時代後期より鎌倉時代前期を中心に書寫され、嘉禎年間の書寫をもつておおむね完成したものとみることができ。書寫の経緯やこれに關つた人などについては三好論文に詳しいのでこれを見られたい。

一切經の装幀はそのほとんどが卷子装であるが、『摩訶般若波羅蜜道行經』『阿闍佛國經』など若干の粘葉装の經典がある。いずれも平安時代の書寫であるが一切經との關係は現在のところ不明である。『河内長野市史』にも收められているが、これらの經典の多くに奥書があり、その内容に注目すべきものがあるので、ここに紹介しておく。『摩訶般若波羅蜜道行經』卷第三には、

保安五年□□五日巳時奉書交已了／念佛宗僧運覺とあり、他の經典もほぼ同文のものである。執筆者がこの時期に念佛宗と名乗っていることが注目される。一切經との關係や金剛寺との關係について検討すべきものである。

ところで書寫が完成したのち、この一切經は同寺に安置されていたのであるが、南北朝時代には金剛寺に滞在した後村上天皇がこの一切經中の『大般涅槃經』を閱讀

し、その由を記した正平十四年（一三五九）の自筆奥書があり、ひとところ注目をあびた。なお今日では、この『大般涅槃經』は一切經とは別個に管理され、重要文化財に指定されている。その後、正徳頃には修補が行われたようで、正徳四年（一七一四）の修補奥書をもつものがあり、このときのものと思われる表紙を付す經卷が散見する。また『小品般若經』などいくつかの經典はこのとき折帖装に改裝されている。

また現在、成實堂文庫に藏される『一切經目錄』卷上は、徳富蘇峰の識語によると、もと金剛寺にあったものとされている。同文庫の目錄によると、江戸時代末期の書寫とされており、江戸時代における金剛寺一切經の状況を伝える資料かとも思えるが、未だ調査するにはいたっていない。

三 金剛寺一切經の特徴

およそ寫本の一切經は、一般にその底本が一樣ではなく、様々な系統の本が混在している。經典ごとにその本文の系統が異なることがあることは言うまでもないが、同一經典においても卷ごとに基づくところの底本が異なることさえある。

日本においては、江戸時代初頭に天海版一切經が刊行されるまで完成した刊本一切經はなく、本格的な刊本一切經の流通はそれよりもまだ先の鐵眼が刊行をはじめた。これ以前は一切經はすべて寫本もしくは中國あるいは高麗・李朝から將來された外邦開版の刊本であった。奈良時代においては宮中を中心として盛んに一切經が書寫されたことは正倉院文書などによって知ることができ、〈五月一日經〉をはじめとして多數現存している。平安時代においても一切經の書寫は盛んに行われ、院政期から鎌倉時代初期にかけては特に多くの書寫がなされたことは先學の指摘するところである。

從來、古寫の一切經は日本史や國語國文學、書道・藝術の研究の資料として用いられることがほとんどであった。『大正新脩大藏經』（以下『大正藏』と略）編纂に際しては〈聖語藏〉の古寫本等が對校本として用いられたが、これは例外的なことで、『大正藏』編纂以降、一般的には特定の經典を除いて佛典の本文研究に古寫の一切經が利用されることは極めて少なかった。これは多くの古寫經が古寺大刹に藏され利用しがたかったことも一因ではあったが、佛教研究者が關心を拂わなかったことにも原

因がある。特に平安時代後期から鎌倉時代にかけて書寫されたものについては、書寫當時すでに刊行されていた宋版の轉寫本、あるいは宋版等とテキストの淵源を同じくするものとの思いこみもあり、十分に活用されるには至っていない。

從來より一部では經典研究における古寫經のもつ重要性について指摘する意見もあったが、近年ようやく古寫經の經典研究での活用が注目されるようになってきた。名古屋の七寺にある古寫本一切經中より古逸の經典や異本が多數見いだされたことがその契機となっている。七寺の調査・研究では、中國撰述經典や日本撰述經典（いわゆる偽經）に關心が集中しがちであるが、いわゆる眞經についても、その本文研究に資するところは多い。

また、古逸の經典の存在は七寺のみに限られるわけではなく、目録等によれば法隆寺一切經など古寫の一切經中には、刊本一切經には含まれていない經典が收録されていることが判明している。七寺一切經に多くの古逸經典が収められているのは、書寫に際して用いた經典目録の種類やその書寫方針および書寫に用いた底本の種類によるものであり、他の一切經においても同様の可能性が存在する。先にも記したが、一般に一切經の書寫に用い

られる底本の種類は一樣ではなく、底本の所在も一カ所とは限らない。ある部分は南都の某某寺、ある部分は京都の某某寺、ある部分は宋版の系統を、ある部分は奈良時代の寫經を用いているというようなことはよくある事例である。

奈良時代から盛んに行われてきた一切經の書寫は、當初いかなる目錄に従っていたか確かではないが、入唐僧玄昉が、編纂されて間もない『開元釋教目錄』（以下『開元錄』と略）を將來してより後は、この目錄に依つて書寫するのが通例となつたとされる。この目錄は智昇によつて開元十八年（七三〇）に撰せられたもので、歷代經錄のなかでも最も評價の高いもので、唐代中期以降の經錄の標準となつている。その後編纂された諸目錄はこの『開元錄』を増補改訂する形で編纂されているものがほとんどである。その後貞元十六年（八〇〇）に、圓照によつて『貞元新定釋教目錄』（以下『貞元錄』と略）が撰せられたが、構成や體例は『開元錄』を踏襲しており、若干の改訂と『開元錄』後に翻譯された經典の増補を行っている。唐中期以降盛んに譯された密教經典の多くはこの目錄に收められている。平安時代初期には日本へももたらされ、平安時代後期から鎌倉時代にかけての一切

經書寫は『貞元錄』によつて行われたと考えられている。この『貞元錄』は奉敕撰であるにもかかわらず、中國においてはあまり用いられなかつたらしく、宋版以降の中國開版一切經にも收められていない。（高麗再雕本大藏經）（以下〈高麗藏〉と略）には收められており、『大正藏』もこれを底本としている。しかしながらこの〈高麗藏〉所收のものは、三階教關係經典を削るなど後世の改變が加えられたもので、本來の姿を伝えるものではないといわれている。これに對し奈良時代や平安時代に書寫された『貞元錄』は改變を加える以前の原貌を伝えるものが多く、經錄研究のうえで重要なものとされている。またこれら古寫の『貞元錄』も諸本のあいだに若干の異同がある。^⑦

また別の問題として〈不入藏目錄〉の問題がある。日本の古代・中世の一切經書寫は『貞元錄』によつてなされたとしたが、具體的には同目錄の卷第二十九第三十の「入藏錄」に準據して書寫整備されたものと思われる。この「入藏錄」の末尾には〈不入藏目錄〉という部分があり、いわゆる別生經や偽經などが列記されている。元來ここに收められている經典は、目錄編纂者がしかるべき理由があつて一切經に收錄する必要がない（あるいは

収録してはいけない」と判断したものである。しかし日本の古寫本一切經においては、この〈不入藏目錄〉所收經典も書寫する方針をたてたものもあるようで、七寺一切經はその代表的遺例である。この問題も七寺一切經にある特有の性質ではなく、別の一切經においてもその可能性がある。〈不入藏目錄〉所收經典の書寫流通については、日本における經典觀や經錄のもつ意味（特に敕定の目錄）と深く關わるものと思われる。

ところで金剛寺一切經がどの種類の目錄を用いて書寫整備がおこなわれたかについては、確實にはわからない。おそらくはこの時代に一般的であった『貞元錄』に準據していたと思われるが、どのような『貞元錄』を用いたについては現在のところ不明である。また『貞元錄』未收の密教經典・儀軌類が若干あり、これらが一切經本體と書誌的特徴がほぼ同様であり、検討を要する問題である。金剛寺一切經の特質については、今後の調査の進捗とともに次第に明らかになることと思うが、現在のところ判明しているものについていくつかを紹介しておく。安世高譯とされる經典およびその注釋書については、次項で紹介するが、これ以外にもいくつか注目すべきものがある。

その一つに『大周刊定衆經目錄』（以下『武周錄』と略）がある。この目錄は則天武后〔武則天〕の治世下、天冊萬歲元年（六九五）佛受記寺の明佺等によって編纂されたものである。この目錄は唐代の佛教を考える上で重要な目錄であるが、後に編纂された『開元錄』が極めて高い評價を受けているのに比し、武后の佛教政策に対する評價ともあいまって充分には評價を得ていない。近時、七寺本の『武周錄』に異本が存在することが紹介された^⑧。七寺本の卷第十一〈大小乘失譯經目〉には通行本と大きな異同が二點有る。一つは收錄經典數である。卷首に收錄典籍の數を四百二十四部と記すことは通行本も七寺本も同じであるが、實數は通行本で四百十八部、七寺本では四百二十六部あることである。また七寺本には一旦本文が終つた後に「從此已下迄卷終唐本不注之」とあり以下九十九部の經典を追加列記しており、都合五百二十六部を収めている。またもう一點、通行本には見えない「聖曆三年奏行」という記述のある經典があることが指摘されている。この「聖曆三年奏行」という記述については大谷大學藏法隆寺一切經本や妙蓮寺藏松尾社一切經本にも同様の記述があることが報告されている。

ところで金剛寺本はどうであろうか。幸いにも金剛寺

にも『武周錄』卷第十一は現存している。これを調べるに、「聖曆三年奏行」の記述については七寺本等と同様である。ただし「奏」ではなく「奉」と書寫されている。しかし收録經典數については、通行本とも七寺本とも大きく異なるものである。卷首には三百七十七部と記されており、實數も三百七十七部で通行本や七寺本に比して少ない。『武周錄』には複數の異本が存在したのである。ここで注目すべきものに『開元錄』の記述がある。『開元錄』卷第十には「總括群經錄」として歷代經錄の標目や典籍數を列記しているが、『武周錄』の卷第十一については、

大小乘失譯經目卷第十一 三百七十七部五百八卷とされ、金剛寺本と收録經典の部數・卷數が一致している。『武周錄』の編纂や流布を考える上で興味深いことで、今後さらに諸目錄を比較検討する必要がある。なお『開元錄』の記述については京都大學人文科學研究所船山徹助教授に御教示いただいた。

またこれも七寺本で注目されたものであるが、『佛名經』にも特徴がある。『佛名經』にはいくつかの種類があることが知られているが、七寺本は十六卷本といわれているもので、日本ではあまり現存がないとされていた

ものである。金剛寺一切經中には複數部の『佛名經』が現存している。この中には十六卷本の系統に屬するものが複數あるが、七寺本と全く同本か否かについては現在調査を進めている。

この他にも通行本とは異なる經典として『五百問事經』が挙げられる。この經典のテキストの變遷については船山徹『目連問戒律中五百輕重事』の原形と變遷に詳しいが、金剛寺本は船山論文にいうところのD類にあたり、日本の古寫經に多く存する。このほかにも『摩訶般若波羅蜜經』は、内容についてはいまだ吟味していないが、調卷のうえでは、『大正藏』の校勘に用いられているところの〈聖語藏〉の神護景雲二年（七六八）書寫本と同系統である。また唐地婆訶羅譯『大方廣佛華嚴經續入法界品』は北宋初期に開版された〈開寶藏〉を底本に用いている。〈開寶藏〉は北宋初期に刊行された初めての木版印刷による一切經であるが、日本では入宋した裔然が將來したものが知られており、これの轉寫本と推定されるものが石山寺や七寺など諸寺の一切經にまみ見受けられる。〈開寶藏〉は今日ではほとんどが失われており、轉寫本といえども〈開寶藏〉の研究においては貴重なものである。これ以外にも宋元版や高麗版と異

なる系統の經典が多く含まれる可能性は高いが、今後の詳細な調査によって明らかにしていくこととしたい。

經典本文とは別に、經典に記される訓點資料もある。

『大唐西域記』『大唐大慈恩寺三藏法師傳』等の史傳のほか、『觀無量壽經』などの經典にも訓點が付されていることが確認されている。

また、一切經と一具のものではない可能性が高いが、『般若心經』を連寫したものの紙背に禪惠の奥書のある偽經類を書寫した卷子がある。書寫されているのは、『佛說六字神咒經』『佛說壽延經』『佛說消除疫病神咒經』『佛說却溫黃神咒經』『佛說咒賊經』『佛說宇賀神王福德圓陀羅尼經』『佛說一切如來金剛壽命陀羅尼經』『佛說護諸童子陀羅尼咒經』である。日本撰述と思われるものもあり、偽經の成立や書寫流通の研究の重要な資料となるものもある。また『佛說壽延經』の卷末には、

イ本梵釋寺經藏 在此經

承久二年春比於醍醐寺遍智院書寫畢／東寺末業成實
文保二年八月五日以中性院御本主合之則依加訓點了

愚推也／東寺末業頼心

という奥書があり、日本古代における一切經や章疏類の書寫事業を研究するうえで重要な位置にある梵釋寺の名

があることが目を引く。^①

その他内容とは別に料紙にも注目すべき點が認められる。ひとつは宿紙の多さである。宿紙は文字の書かれた反故紙を漉き返したものとされているが、實はそのほとんどが紙を漉く際に大量に墨を流し込んで製作したものとわれている。宿紙自体はさほど珍しいものではないが、一切經に宿紙が用いられる例をあまり聞かない。ことに金剛寺一切經においてはかなり多くの宿紙が用いられており、『大寶積經』はほとんどがこれである。何らかの特別な事情があったかについて検討する必要がある。また料紙の長さについても注目すべきものがある。通常の料紙は五十―六十センチのものであるが、ときおり長大な料紙が見受けられる。これは長大な紙を一度に漉いたものではなく、五十センチ前後の紙の端に加工を施し、糊繼をせず一枚の紙のごとくにしたもので、三メートルを超えるものもある。いかなる理由でこのような料紙を必要としたかについても現在のところ不明である。今後、調査が進むうえで検討すべきものが増加していくと思うが、次に新出の安世高譯とされる經典および注釋書について報告する。

三 新出安世高關係經典

先にも記したが、近時、この金剛寺一切經中より從來知られているテキストと内容を異にする、後漢時代に安世高が翻譯したとされる經典、および逸書とされていた經典を見いだすことができた。この經典は『安般守意經』（『大安般守意經』『安般經』等いくつかの呼稱があるが、以下、特別に事情の無いかぎり『安般守意經』とする）および『佛說十二門經』『佛說解十二門經』というものである。この三種の經典はひとつの卷子に連續して書寫されているものである。まず、本經卷の形態等の書誌について以下にする。この新出經典は金剛寺一切經中に二本存する。便宜的に一本を〈甲本〉とし、いま一本を〈乙本〉とする。二本は基本的には内容を同じくし、書寫年代もまた同じである。

〈甲本〉

全二十一紙 一〇四・五（センチ）

紙質 楮打紙

第二紙法量 縱 二五・五 横五一・一

界高 二〇・〇 天高 二・四 地高

表紙 栗皮色

外題 佛說大安般經 卷上

ラベル 經 卅七 69

軸 無

内容

安般序

（第一紙第二行目～第三紙十一行目 第一紙第一行目空白）

首題 安般守意經（第三紙十二行目～第十紙一行目）

尾題 なし

首題 佛說十二門經（第十一紙二行目～第十三紙第

二十六行目）

尾題 なし

首題 佛說解十二門經（第十三紙二十七行目～第二

十二紙第十二行目）

尾題 十二門禪經（第二十二紙第十三行目 第十三

行目空白行）

〈乙本〉

全十九紙 九九五・一（センチ）

紙質 楮打紙

第二紙法量 縦 二十五・五・ 横 五十四・一

界高 十九・七 天高 二・九四 地

高二・九 界福 一・七 糊代

○・三

表紙 栗皮色

外題 安般守意經 甚函

ラベル 經 卅七 50

軸 存

内容

安般序

(第一紙第二行目～第二紙二十九行目 第一紙第一行目空白)

首題 安般守意經(第二紙三十行目～第九紙二十三

行目)

尾題 なし

首題 佛說十二門經(第九紙二十四行目～第十三紙

第十行目)

尾題 なし

首題 佛說解十二門經(第十三紙十一行目～第十九

紙第三行目)

尾題 十二門禪經(第十九紙第五行目 第四目空白

行)

金剛寺一切經中にはいま一本『安般守意經』があるが、この本は通行の二卷本『安般守意經』の卷下である。表紙に、

佛說大安般經 卷下

と外題が墨書されており、(甲本)の外題と對應することから、ある時期には内容とは關係なくこの二本が二卷本『安般守意經』の上下として扱われていたことを示している。

新出の金剛寺本『安般守意經』は四つの部分によって構成されている。第一は序文で、通行本に付される康僧會の撰になるものと同文である。第二は『安般守意經』の本文であるが、通行の一切經中のものと内容が大いに異なる。第三の『佛說十二門經』および第四の『佛說解十二門經』はともに、今日利用されている何れの一切經にも未收のもので、單行でもその存在が知られていないものである。以下、各々について簡単な紹介をする。

新出の金剛寺本『安般守意經』は、通行のものと同内容が大きくことなる本である。安世高の翻譯とされている經典は多數あるが、眞に安世高譯であるか否かについては、古くより問題が提起され、近代においても諸家の問題とするところである。このことは『安般守意經』につ

いても同様である。『安般守意經』は數息觀について述べた經典で、安世高の譯經や中國初期禪觀思想研究において特に重要視されているものであるが、さまざまな要因により十分に内容が検討されているとはいえない状況である。この異本の出現は『安般守意經』および安世高の研究にとって重要なものといふことができよう。

現在一般に用いられている『安般守意經』は、一卷本と二卷本があるが、その調卷に違いはあるものの、内容はほぼ同じである。『大正藏』では、本文は『高麗藏』によつて、宋元明三本および宮本（すなわち宮内省圖書寮藏宋版大藏經 福州開元寺版カ？）をもつて對校しているが、若干の異同はあるものの本文に根本的な違いは無い。ただこの『安般守意經』は内容にさまざまな問題があるとされている。ひとつは『安般守意經』には二種類のものが有つたことである。『出三藏記集』卷第二の『新集經論錄』に、安世高譯經三十四部四十卷を擧げる内に

安般守意經一卷 安錄云小安般經

大安般經一卷

とあるように大小二種の『安般守意經』が有つたことを傳えている。またいまひとつ別の問題が存する。本文と

注釋文が混在しており、その讀解を困難ならしめていることである。〔高麗藏〕所收本の末尾に、

此經按經首序及見經文。似是書者之錯經注不分而連書者也。義當節而注之。然往往多有不可分處。故不敢擅節。以遺後賢焉

とあるように、現行の『安般守意經』は、〔高麗藏〕刊行時には既に注釋が本文中に混在する状態になっており、その本來のすがたを伝えるものは失われたとされている。また通行のものが、經錄にいうところの『大安般經』であるのか、あるいは『小安般經』に當たるのかについて、も確定的なことは判明していない。宇井伯壽は『譯經史研究』において『佛說大安般守意經』の本文と注釋との區別を試み、譯注を施しているが、充分なものとはなっていない。

金剛寺本は通行本と大いに内容が異なるのであるが、その分量も現行本に比して少ない。ただ現行本も先に記したように本文と注釋が混在しているものであるから、通行本が『大安般』で金剛寺本が『小安般』と即斷することもできない。構成や文言については通行本とかなりの違いがあるものの、内容については相關關係が認められる。参考に、その冒頭部分の書影を付した。（寫眞①）

寫眞 ①

次に、『佛說十二門經』であるが、この經典は、『出三藏記集』卷第四〈新集續撰失譯雜經錄第一〉に

第一四門經一卷 出大十二門經

第二四門經一卷

第三四門 一經 第三四門即名甘露道律經檢雜目錄
或有不稱第三四門而直云甘露道律經者

佛入甘露調意經一卷 從第一四門至甘露調意凡四品
並是大十二門經一部後人分品寫出遂分成四經生經一部亦如此

と記述されているものとの關連が考えられる。現在では『出三藏記集』に收録されている道安撰「十二門經序」「大十二門經序」が伝えられるのみで本文は散逸したものと考えられている。隋の文帝の仁壽二年（六〇二）に彥棕等によって編纂された『衆經目錄』（仁壽錄）の卷第五は經錄にはその名があるが經本が無いものを擧げている部分であるが、その内に、

大十二門經一卷

小十二門經一卷

右二經後漢世安世高譯

とあり、當時すでに散逸していたようである。

梁の僧祐撰『弘明集』は六朝時代の佛教關係の文章を

寫眞 ②

豊富に收めることで知られ、その中には今日逸書となっている經典の逸文も多くある。この『弘明集』卷第十三に『十二門經』を引用する部分がある。それは「奉法要」と題する晉の郗超（三三六―三七七）の文に引用されている。ここに、

十二門經云。有時自計。我端正好。便當自念。身中无所有。但有肝腸膾肺骨血尿溺。

とある。ところで金剛寺本『佛說十二門經』には、

第一門。爲何等爲自觀身有時自校計。我端正好。便墮貧已墮貧。便當自念。身中无所有。但有肝肺腸膾骨肉。有何等端正好。……

という部分がある。（寫眞②）これは先に挙げた『弘明集』の記事とほぼ同文であり、この金剛寺本が逸書とされている『十二門經』そのもの、あるいはそれと密接な関係のある本である可能性を示している。ただ金剛寺本が經錄にいうところの『大十二門經』であるか『小十二門經』のいずれと關係するかについてはいまだ判断できるとはいわていない。また同じく「奉法要」に、

異出十二門經云。人有善恆當掩之。有惡宜令彰露。

夫君子之心無適無莫。過而無悔當不自得。宜其任行藏於所遇。豈有心於隱顯。然則教之所施。其在常近

③ 眞寫

乎。

という一文があるが、ここに言う『異出十二門經』なるものとの關連についても未だ不明である。

次に第四部分の『佛說解十二門經』であるが、これは第三部分の『佛說十二門經』の注釋書である。『出三藏記集』卷第五（新集安公注經及雜經志錄第四）に、

大小十二門者。禪思之奧府也。爲各作大作注。大小二門二卷。小十二門一卷 今有

とあるものの内のいずれかにあたるものと思われる。また隋の開皇十四年（五九四）に法經等によって編纂された『衆經目錄』（『法經錄』）卷第七の此方諸德著述の部分には、

陰持入經注解一卷 釋道安

大道地經注解一卷 釋道安

大十二門經注解一卷 釋道安

十二門禪經注解一卷 釋道安

安般經注解一卷 釋道安

右五經是小乘經注解

と道安の注釋になる小乘經の注五部を列記している。道安は大小の『十二門經』に注釋を加えているようであるが、『十二門經』自體がすでに逸書となっており、この

金剛寺本『佛說解十二門經』が道安撰の注釋であると假定しても、大小いずれかについては即斷することはできない。ただ金剛寺本の尾題が「十二門禪經」となっており、『法經錄』の「十二門禪經注解」との關連をうかがわせるが、推測の域を出ない。(寫眞③)

以上、新出の安世高關連の經典三種についてその概略を記したが、『弘明集』所收「奉法要」の記事等は落合俊典・華頂短期大學教授の御教示によるものである。^⑫

おわりに

ここに天野山金剛寺所藏の古寫本一切經と新出の安世高關連の經典についての簡単な紹介をしたのであるが、多くの検討すべき課題がのされている。そのひとつはこれら新出の經典が眞に安世高や道安の譯や撰であるかについてである。またこの經典がどのような傳來で金剛寺一切經に收められるにいたったかについても考えなければならぬ。第一の問題とも關連するのであるが、筆者がこれらの經典を金剛寺の一切經中より見出した時に考えたのは、これらがあるいは安世高や道安の時代より遙か後世に書きあらわされたものである可能性である。經錄によれば隋代には既に容易には見ることでできな

ったものようである。しかしながら、金剛寺本は平安時代後期から鎌倉時代前期の間に書寫されたもので、當時の佛教界の狀況を考えるに、新たに安世高關連の經典を偽造する必然性はなく、その後この本が流行した形跡も認められない。おそらくは奈良時代もしくは平安時代に、中國より將來されたものが轉寫された可能性が高いが、その底本がどの所藏であつたか、いつ頃日本へもたらされたかなどについて、内容の解明とともに今後明らかにしていく必要がある。

筆者は佛教學を専攻する者ではなく、この問題に的確に答えを出す能力を有しないのであるが、現在、落合教授を中心に『安般守意經』の會讀を行っており、新出『佛說十二門經』『佛說解十二門經』とともにその内容について順次報告していく豫定である。また金剛寺一切經全體についても、後藤教授、落合教授とともに整理・調査をすすめており、その全貌についても報告をしていく豫定である。

最後に、貴重な一切經の調査について、金剛寺當局、とりわけ堀智範座主には特別の御配慮をいただくとともに、石堂法瑞師はじめ同寺の皆様には調査時には多大な援助をいただいている。ここに深甚なる謝意を表する次

第である。

本稿は平成十二年度科学研究費補助金（基盤研究A研究（1））による研究成果の一部である。

参考文献

- 金剛寺の歴史については下記の文献を参考にした。
『大日本古文書』家分け第七 金剛寺文書 大正九 東京帝大史料編纂掛
『天野行宮金剛寺古記』（大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告書第六輯）昭和十 大阪府
『金剛寺所藏延喜式神名帳の調査』（大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告書第八輯）昭和十三 大阪府
『大阪府下に於ける後村上天皇の御聖蹟』（大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告書第九輯）昭和十三 大阪府
『河内長野市史』河内長野市
金剛寺一切經に關しては下記の論文がある、現在、簡略な目録を作成する段階で精査するに至つておらず、一切經の概要については、多くを三好論文を参考にした。
『金剛寺一切經全貌』三好鹿雄 『宗教研究』十三—六 昭和十一
『河内金剛寺所藏の古典古寫經類に就いて』木村武雄 『大乘』十七—九 昭和十三
經錄に關しては主に下記の文献を参考にした。
『佛教經典總論』（佛書解説大辭典 別卷）小野玄妙 大東出版社 昭和十一
『後漢より宋齊に至る譯經總錄』常盤大定 東方文化學院東京研究所 昭和十三
『經錄研究』前篇 林屋友次郎 岩波書店 昭和十六
安世高の譯經については下記のものを参考にした。
『安世高の譯經に就いて』大谷勝真 『東洋學報』四十一—四
E. Zurcher, A New Look at the Earliest Chinese Buddhist Texts, From Benares to Beijing. Essays on Buddhism and Chinese Religion in Honour of Prof. Jan Yun-hua, 1991
Antonio Forte, The Hostage An Shigao and his Offspring, An Iranian Family in China, Istituto Italiano di Cultura Scuola di Studi sull'Asia Orientale, 1995
Paul Harrison, The Ekottarikagama Translations of An Shigao, Baudhavidyasudhakarab Studies in Honour of Heinz Bechert on the Occasion of His 65th Birthday, Indica Et Tibetica Verlag Swisttal-Oderdorf, 1997
安般守意經に關しては下記の論文を参考にした。
『譯經史研究』宇井伯壽 昭和四十六 岩波書店
『インド佛教から中國佛教へ——安般守意經と康僧會・道安・謝敷序など——』荒牧典俊 『佛教史學研究』十五—二 一九七二
『安世高譯『安般守意經』現行本の成立について』デレアヌ・フロリン 『東洋の思想と宗教』九 一九九二
『出三藏記集』（大乘佛典）中國・日本篇（三） 荒牧典俊譯 中央公論社 一九九三

『出三藏記集序卷譯注』 中嶋隆藏編 平樂寺書店 一九九七

經典および經錄の引用は原則として『大正藏』によった。

注

- ① 金剛寺の文書・典籍の調査は早くに明治十九年より行われていた。『歴史地理』三三三六（大正八年）の彙報欄によると、調査は明治十九年以來、兩三度におよび、大正八年八月には、『大日本古文書』家分け第七出版準備のため黑板等が史料採訪のため訪れている。この時、新たに古文書百七十通、記録類十四點、文集類六點、經疏聖教類三十九點、著述類十三點をあげている。

- ② 後藤昭雄『平安朝漢文文獻の研究』 吉川弘文館 平成五

- ③ 『東方學報 東京』第七冊（昭和十一年）の彙報欄によれば、昭和十一年春に常盤大定等が出張しており、その七月二十七日から八月二日まで調査整理を行った。同年十月一日に三好が研究所で金剛寺一切經に關する講演を行っている。

- ④ 承曆三歲次己未八月四日己亥書寫始／同年十月廿六日辛

酉一帙書寫已畢

- ⑤ 久壽二年歲次乙亥十一月廿七日辛未開題供養

- ⑥ 『お茶の水圖書館藏 新修成實堂文庫善本書目』 川瀬一馬編著 一九九二（財）石川文化事業團お茶の水圖書館

- ⑦ 「川原寺の一切經に就きて」 小野玄妙 『佛書研究』四十 大正七

- 「日本に遺存する原本『貞元新定釋教目錄』」 塚本善隆 『神田博士還曆記念書誌學論集』 昭和三十二

- ⑧ 『中國・日本經典章疏目錄』（七寺古逸經典研究叢書第六卷） 落合俊典編 大東出版社 一九九八

- ⑨ 『中國撰述經典（其之三）』（七寺古逸經典研究叢書第三卷） 落合俊典編 大東出版社 一九九五

- ⑩ 『東方學報 京都』第七十冊 一九九八 京都大學人文科學研究所

- ⑪ 「梵釋寺藏經に就いて」 柴田實 『支那佛教史學』五一三・四 一九四二

- ⑫ 『弘明集研究』 牧田諦亮編 京都大學人文科學研究所 昭和四十八・五十